

October 1st, 2016
Prepared by B. Murakami

戦国の三英傑の勤務評定

尾張と三河からなる今の愛知県地方は、戦国時代末期の16世紀に三人の英傑を次々に産んで、日本を中央主権国家にまとめる役割を果たしました。

明治維新後の日本の急速なる近代化達成の秘密は尾張と三河を抜きにしては私には語れません。

三人の英傑が率いてきた集団の特性とリーダーの人間性についてビジネスの観点から分析してみました。

① 尾張で生まれた織田組

この会社はベンチャー企業でした。斬新な経営戦術と卓越した人材起用法でマーケットに参入して老舗企業の商圈を奪っていきました。人使いは荒く、実力主義で若手、新参者を次々に幹部に起用し、西の方面に進出すること火の如しでした。余りにも急激なる成長戦略を展開したため、経理幹部の育成が間に合わず、外部から起用した異端分子の不評を買って本能寺で殺害されてしまいました。

② 次は豊臣商店です

尾張は中村の貧しい農民の子供だった幼名日吉丸は、前途有望なる社長を探して各地を放浪した末、信長の殿は仕えるに値する大将だと見込んで、近づくや、たった一度の面接で入社を勝ち取り、人の心をつかむ知恵と商人のような才覚を武器に先輩社員を次々に追い抜いて、出世街道を驀進しました。「機転」と「スピード」と「意外性」に満ちた抜群の「アイデア」でも信長の後継者争いに勝利し、信長があと一步という所で逸した天下統一を成し遂げ、天皇に取り入って太閤の地位に上りつめました。

しかし、独断専行の悪い癖があって、長期の戦略を欠き後継者育成を怠った上に、無謀な海外侵略戦争即ち朝鮮侵略で墓穴を掘って一代限りの個人商店で終わりました。秀吉の得意な戦法は人海戦術でした。秀吉との戦いに敗れて臣下の礼を取り、秀吉の命令に服するようになった各地に有力大名に動員令を掛けて集めた大軍勢で次なる敵に襲い掛かるのが秀吉流の戦術です。

島津征伐、小田原城攻めはこの戦法で攻略に成功しましたが、朝鮮攻略戦は物資補給に失敗して、二度とも撤退に追い込まれて失敗しました。子飼いの武将からも反発を買って兵力と財力の両面で多大の損失を蒙って大失敗に終わったのです。「浪速のことは夢のまた夢」という泣き言を並べた辞世の句を残してこの世を去りました。

Yes Man だけで側近を固めた政権は守勢になったとき、内部分裂して、崩壊するのが当

たり前です。

豊臣商店の末路は店主ともども倒産しかありませんでした。

③ 最後の英傑家康を頂点に頂く徳川株式会社

武門の名門源氏の血を引いたと言われた家康の人生は苦難に次ぐ苦難、辛抱に次ぐ辛抱で苛め抜かれた人生でした。耐えがたきを耐え、厳しい現状から這い上がってきただけあって、今川、武田、織田、北条、豊臣の個性派軍団から丹念に勝利の方程式を学び、政策、戦略、戦術、国造りに最新の工夫を凝らし一段一段梯子を上って行きました。独断専行が過ぎる豊臣商店は、対象の戦略なき気まぐれが災いして、身内ですら厄介者扱いする困った老人に成り下がりました。一方、三河の苦勞人家康は、家来集との相互信頼の深さを武器に人望と団結力を高め、秀吉亡き後の第一人者の地位を世間から与えられ、天下分け目の関ヶ原のオーディションで大勝利を収めたのでした。

AKB や乃木坂何とかと違って、渋みのある玄人好みの大統領として日本の頂点に立ちました。

家康は共和党のトランプ氏として派手な言動と深知恵を売り物にしているトランプ氏と違って、健全な政策を打ち出して、以降 260 年余りの長期に亘って戦争のない太平な世の中を設計、施工しました。

政策の根幹は『法治主義』でした。秀吉の気まぐれな政策は“人治主義”の欠陥商品でした。

ナポレオンも成し得なかった 3 世紀に亘る天下泰平のヒミツは、武家諸法度、禁中並びに公家諸法度、檀家制度による庶民の管理など、将軍が変わっても、政治の骨格は変えないという法治主義にありました。

徳川株式会社は法律の下で安定した政権運営を志した政権でした。これを PAX TOKUGAWANA（徳川方式での平和構築）と私は呼んでいます。

徳川政権は最初と最後の両方が見事でした。

最初の功労者は家康で、最後の功労者は慶喜です。

15 代将軍慶喜の現役引退興行は見事でした。開国か攘夷か、国論が真っ二つに分かれて各地で抗争が続発する危機的な政治環境下で熟慮を重ねて慶喜はなんと「大政奉還」の決断をしたのです。

将軍慶喜と陸軍総裁勝海舟といった幕府首脳部に繊維が乏しかったことがこの英断の背景にありました。広い視野を持つこの二人は、日本が長期の内戦で混乱したら、中国の先例通り西欧列強が介入して彼らに植民地支配されてしまうだろうと正しく予測し、わざと戦わずに逃亡したり投降したのであります。

自分たちの既得権益の保持よりも、日本全体の将来を慮って無駄な戦いを厳しく諫めた神君家康公の家訓が守られた法治国家「徳川国」の引退興行の様子を後世に伝えたいと思って、今回東京大手前会の歴史文化研究会は徳川家康をトップバッターに起用してここ葛西臨海公園で歴史文化イベントを開催します。

歴史の教科書では習わなかった歴史の舞台裏話をたくさん発掘してきましたので、次回以降面白おかしく真面目に披露してゆきます。

(次回に続く)